

## 「戦争の痛みで生まれた学校」

2023年11月

中山 昇

(1925～2019 \*学園創立者)

主は多くの民の争いを裁き はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。  
彼らは剣を打ち直して鋤とし 槍を打ち直して鎌とする。  
国は国に向かって剣を上げず もはや戦うことを学ばない。

(ミカ書 4章3節)

清教学園はどうして生れたかと振り返ると、そこに前の太平洋戦争の敗戦の経験が色濃く浮かび上がります。清教学園は、戦争の痛みの中から生れた学校という表現がいちばん的を射ています。

太平洋戦争で日本がポツダム宣言を受諾したのが昭和20年で、清教学園の創立は昭和26年であります。この時期、日本の誰もが敗戦の惨めさを噛み締めていました。戦争で家族を亡くして悲しんでいる人が、至るところにいました。戦災孤児を巷で多く見かけます。爆弾で家を焼き出された人たちが近所で間借りをしていました。外地から返ってきた人が途方に暮れている姿も見ました。食料が不足して、法律を守っていれば飢え死にするしかありません。仕事がなくなって、自殺に追いやられる人も出ました。誰もが、身辺を見廻しながら、どうしてこんなことになったのか、これからどうすればいいのかと考えずにはおれませんでした。

昭和20年、私は20歳で、師範学校の二年生でしたが、志願して熊本の陸軍予備士官学校に入隊し、4ヶ月後に敗戦に遭遇するというめぐり合わせでありました。当然のこととして師範学校に復学して、また教師への道を歩き出したのですが、そこで、戦前、戦中の教育は間違っていたと言われて戸惑いました。しかも、かつての教師たちは上から言われた通りにしただけだから、この敗戦に自分の責任はない、今度はまた言われるままに民主主義で行けばよいのだという風に見えて、個人の誇りも責任も霞んで見えます。目の前に戦争による悲劇があるのに、時代のせいにして、自分の責任を棚上げにしてしまう教師にはなりたくないという思いが募りました。たとえ小さくても自分なりの答えを見つきたいと休学届けを出して、また学校を飛び出しました。そして1年半、戦争でなくなった先輩の生き様や、悩みを共にする友だちの手引きで、キリスト教教育の模索が自分の内に始まりました。聖書と平和憲法はその旅路を導く灯台となりました。そして、「清教学園設立趣意書」に掲げられる愛と知性を掲げる仲間に入れていただいたのでした。

学園の趣意書には先ず、「神を畏れず、個々の人格を滅却したる、過去の教育が、軍閥と官僚の走狗となり、遂に、国民をして戦争にまで追い込んだであろうことは、今更いうまでもないことである」という宣言があります。そして、「一人ひとりの生きた魂を、神に直結すること以外には、到底日本を救う道はあり得ない」ということ、次に「神を愛し、人を愛し、而も真理を追求して知性を高める、真の基督精神の道場たる、生きたる学校の設立を、切望される所以である」と訴えています。

(次ページに続く)

戦争に負けたことの悲しみと、そこで起こった罪の姿をじっと噛み締めて、ふたたび過ちを繰り返さないように、教育を立て直そうというのが建学の動機であったわけで、基本に個人の人格の尊重が据えられています。「信仰」と「愛」と「希望」と「真理」と「平和」をキーワードとする学校の誕生であります。その意味において清教学園は戦争に負けた痛みから生れた学校であるといえましょう。

一方、戦争に対する反省は、負けた者だけのものではありませんでした。勝った者にも同様の苦しみはあるし、また、違った苦しみに遭遇するのです。清教学園が開校したその年の夏にアメリカから来た宣教師の J. L. ドリスキル先生に、「どうして日本に来られたのですか」と聞いたことがあります。先生の答えはこうでした。

私は米国、ヴァージニア州、キャンプベル地方の農村で誕生し、成長しました。父の名はエリシヤ・ハンドナル・ドリスキル、母の名はアニー・カーワイル・ドリスキルで、元気な六人の子供を生み育ててくれました。祖父母は大きな農場を持っていて恵まれた家庭でした。母は熱心なクリスチャンで、毎日曜には教会の出席を欠かしませんでした。私が牧師、宣教師になる基礎を造ってくれたのはこの母です。

私が牧師になり、宣教師として日本に行く希望を持ったのは、第二次大戦の終わろうとする頃でした。当時ドイツは降伏し、日本はまだ戦っていましたが、それは、私が実際に自分の耳で神様の声を聞いたということではありません。しかし、神様が私に向かって「もし、この世界がよりよい場所になるために働きたいと思うなら、武器を捨て、聖書を持って日本に行け」と仰っているように強く感じました。当時、私はまだ一人の日本人にも会ったことなく、その目的を果たすためには、尚大学と神学校で合計七年以上の勉強をしなければならぬことが分かっていたのですが、私はその召しに応えることとしたのです。

こうして日本に来たドリスキル先生の心にも戦争による痛みがついて廻っていたのです。武器を持って人を殺すということはどんなに罪深いことかを考えずにはおれません。良心を誤魔化せない人は、戦争に勝っても、勝ったことで一層痛みを感じることになりました。ドリスキル先生にとってその一つは広島や長崎に落とされた原爆のことです。昭和27年11月に広島にある流川教会の谷本清牧師を招いての講演会が清教学園で開かれました。ドリスキル先生は事前から緊張しておられる様子でありましたが、その惨状をつぶさに聞いて、顔は蒼白になりました。

「原爆を落とさなければ日本の降伏はもっと遅れただろう」とその使用を正当化するアメリカ人もいれば、「あれはしょうがなかった」と真実から目をそらす日本人もいます。これらの人たちは何れも戦争の持っている人間の罪に対して真実に取り組もうとはしません。しかし、ドリスキル先生は米国の犯した罪の大きさに深く心を痛めておられたのです。

学園設立の趣意書で、初代校長の植田真一先生が冒頭に取り上げられたのが「**神なき教育は知恵ある悪魔をつくる**」という先人の警告でありました。地上における競争は果てしなく続くのかも知れませんが、一旦戦争になれば悪魔の支配を免れません。そのことを踏まえて、戦争に手を染めない人間と社会をどう造りだして行くのか、これが戦後に創立された清教学園のイエスさまから与えていただいた問いであったのです。

(出典:「賜生」第50号、2008年2月より)